

## 大倉御所(大蔵御所, 大倉幕府)

(神奈川県鎌倉市二階堂・西御門・雪ノ下3丁目)(清泉小学校)

大倉御所(おおくらごしょ)は、鎌倉時代に相模国鎌倉大倉郷(現神奈川県鎌倉市二階堂・西御門・雪ノ下3丁目一帯)の地にあった源頼朝の邸宅。大蔵御所、大倉幕府とも。治承4年(1180年)から、承久元年(1219年)まで39年間、鎌倉幕府の将軍(鎌倉殿)の御所であった。

### 沿革

源頼朝は治承4年(1180年)8月に挙兵し、10月に鎌倉入りして拠点は大倉に定め、大庭景義を担当として新たな館の建設が行われた。当初は父源義朝の屋敷があった亀ヶ谷が候補地であったが、手狭であり義朝の菩提を弔う寺院もすでに建てられていた事から、大倉の地(東西約270m、南北約200m程度の方形の敷地)になったという。この地が選ばれたのは、大倉が鎌倉の外港六浦と鎌倉を結ぶ六浦道沿いの地であった事と、四神相応の地であった事があげられる。

廊内(敷地内)には、寝殿、対屋、侍所、厩などがあり、東・西・南・北に門がある一般的な貴族の寝殿造であった。頼朝配下が控えていた侍所は貴族の邸宅のそれの2倍の大きさの18間(約37.8m)、厩は15間(約31.5m)で奥州の名馬30頭を収容できる規模であり、武家の総帥の邸宅としての特徴が見られる。そしてその近辺には御家人の宿館が立ち並んでいた。御所内には御寝所などの私的な区域と、公的な区域があり、政務は問注所や評定を行う西中門廊、内厩侍上などで行われた。

頼朝は同年12月12日に上総広常の邸を出て、完成した新亭に入る儀式が行われた。多くの武士たちがこれに従い、出仕の場である侍所には311人が2列に居並び、侍所別当に任じられた和田義盛が帳簿に出欠を記録した。『吾妻鏡』は「これから以降、東国の人々はみな、頼朝の徳ある道を進むのを目にして、鎌倉の主として推戴することになった。」と記している。それまで鎌倉は漁民や農民のみが住む辺鄙な所であったが、この時に道を整えて村里に名前をつけ、家屋が建ち並ぶようになったという。

建久2年(1191年)3月4日、建保元年(1213年)5月2日に焼失し、そのたびに同一敷地に再建されたが、承久元年(1219年)12月24日の焼失後は再建されず、その後の将軍御所は大倉北条義時亭内南方の仮御所(1219年-1225年)を経て、宇都宮辻子御所(1225年-1236年)、若宮大路御所(1236年-1333年)と四転している(松尾剛次説)。

Wikipediaによる

鶴岡八幡宮の東側、清泉小学校の角に大蔵幕府跡の石碑が建っています。

頼朝の墓のある大倉山の下、この小学校辺一帯が鎌倉幕府が置かれた跡で、現在の小学校の敷地は、御所の東北隅の四分の一にあたります。

石橋山合戦の後の治承4年(1180)10月、鎌倉に入った頼朝は、父義朝の住んだ亀谷(かめがやつ)郷に住居を構えようとしたが、亀谷は狭い上にすでに岡崎義実が義朝を弔うため、寺院を建立していたこともあり大倉郷と決定しました。

鎌倉は頼義以来源氏相伝の土地であり、三方が山、南は海に面する天然の要害の地でした。

頼朝は大庭景義を奉行として大倉御所を新築し、2ヶ月後の治承4年12月に完成しました。頼朝が移り住んで幕府が開かれ、後にここは大蔵(倉)幕府と呼ばれ、創設以来46年間、武家政治の中心地となりました。

大蔵幕府は度重なる火災に遭い、その度に同じ場所に再建されましたが、承久元年(1219)正月、実朝が公暁によって暗殺され、同年12月、大蔵(倉)御所も焼失、御所は二階堂大路の仮御所に移され、その後宇都宮辻子幕府

(現・二の鳥居付近の北側)・若宮大路幕府と幕府滅亡まで転々となりました。

治承4年12月、御所が完成し、頼朝は水干を着て馬に乗り上総介広常の屋敷を出発し寝殿に入りました。この日まで頼朝は、六浦道の東隅にあった広常邸に仮住まいしていたのです。

和田義盛が引越しの行列の先陣となり、北条時政父子・足利義兼・山名義範・千葉常胤・安達盛長・土肥実平・岡崎義実以下がつき従い、畠山重忠がしんがりを務めました。後陣も重要な役です。

お供の者たちは侍所に参上し、二列に向かいあって座りました。

この時列席した311人の名前を記録したのが、まだ30代の和田義盛でした。

義盛は石橋合戦の後に安房へ逃れる時、頼朝に侍所別当の職を望んだことから、任命されたばかりでした。ここに東国武士たちは一堂に会し頼朝に仕えることを誓いあい、これを機に御家人達は鎌倉に邸を構えるようになりました。

幕府の規模は東西三町半(約370m)、

南北二町(約220m)、様式は寝殿造でした。

幕府内には政務を司る役所とともに頼朝邸が置かれました。

敷地内には大御所・寝殿・対屋・西釣殿・侍所・厩などの建物があり、東西南北にそれぞれ門が設けられ、頼朝は日常生活を御所の北半分で過ごしました。

厩には30頭の馬を収容でき、武士が控えていた侍所は、貴族の邸宅にあるその二倍の広さがあったと思われる、武家の棟梁の屋敷の特徴がみられます。

「平家物語・義経伝説の史跡を巡る」による

